

THE collected works of LYDIA SICHER

14 Pattern of Life

P.132～ Prototypes

【資料 1】

原型(prototype)、本書と同じ年に出版された『神経症の諸問題』(Problems of Neurosis, Herper & Row, 1964 [1929]) の他には、この語はほとんど用いられていない。「初期のライフスタイル」(九一頁)、あるいは、「ライフスタイルの核」(一〇〇頁)などの説明がされており(「ライフスタイル」については、第四章を参照)、未発達ではあるが大人のライフスタイルの先駆けとなるものとして考えられている。しかし、これがいつ、どのようにしてライフスタイルに変わるのか、という点などについては、はっきりとした説明は与えられていない。原型は四～五歳で形成される、とされているが(三二、五一頁)、ライフスタイルも同じ四～五歳で形成される、といわれており、アドラーが両者を明確に区別していたかどうかはよくわからない。

(『個人心理学講義 生きることの科学』訳注 P.18)

【資料 2】

さて、精神の運動は、器官的生命の運動に似ています。どの心のうちにも現在の状態を越えていき、将来に対する具体的な夢を仮定することで、現在の欠陥と困難を克服しようとする目標、あるいは、理想という概念があります。この具体的な目的、あるいは、目標によって、人は自分が現在の困難に打ち勝っている、と考えたり感じることができます。将来成功する、と心のうちで考えているからです。目標という観念がなければ、個人の活動はどんな意味も持たなくなるでしょう。

この目標を定め、それに具体的な形を与えることは、人生の早期、即ち、子ども時代の形成期の間にかかるに違いない、という事実を、あらゆる証拠は示しています。成熟したパーソナリティの一種の原型、あるいは、モデルが、この時期に発達し始めるのです。このような過程がどのように起こるか想像することができます。子どもは弱いので、自分が劣っている、と考えます。そして自分では耐えることのできない状況にいる、と思います。そこで子どもは発達しようと努力し、しかも、自分で選んだ目標によって定められた方向の線に沿って発達しようと努力します。この段階で発達のために使われる素材は、方向の線を決める目標ほどは重要ではありません。この目標がどのようにして定められるかを説明するのは困難ですが、このような目標が存在すること、そして、その目標が子どものあらゆる運動を支配している、ということは明らかです。実際、早期の子ども時代においては、力、衝動、理性、能力あるいは無能力については、ほとんど理解されていません。実際のところ、これらのことを理解する鍵となるものは何もありません。なぜなら、方向は子どもが目標を定めて初めてはっきりと確立されるからです。人生が取る方向を見て初めて、子どもが将来どんなステップを踏み出すかを推測することができるのです。

「目標」という言葉が言及される時、読者がぼんやりとした印象しか持てないのは当然のことです。それがどのような意味なのか、明らかにしなければなりません。結局のところ、目標を持

つとは、神のようになろうとすることです。しかし神のようになるとは、当然のことながら、究極の目標、そういつてよければ、目標の目標です。教育者は、自分や子どもたちが神のようであろうとしないように注意しなければなりません。実際には、子どもたちが発達の過程において、この究極の目標を、より具体的で直接的な目標に置き換えることが知られています。〔即ち〕自分たちの環境の中で一番強い人を探し、その人をモデルや目標にするのです。それは父親であるかもしれませんし、母親であるかもしれません。なぜなら、男の子でさえ、もしも母親が一番強い人である、と思えば、母親を模倣するよう影響されるからです。後になって、御者が一番強い人である、と考えれば、御者になりたい、と思います。

子どもたちが初めてこのような目標を心に抱く時、御者のように感じ、御者のような服装をし、この目標に一貫したあらゆる特性を身につけます。しかし、ひとたび警官が手をあげれば、御者はただの人になってしまいます……後には医者や教師が、理想になるかもしれません。なぜなら教師は子どもを罰することができ、強い人としての尊敬の念を子どもに引き起こすからです。〔『個人心理学講義 生きることの科学』 P.15～P.16〕

【資料 3】

原型、即ち、目標を具体的なものにするパーソナリティが形成される時、〔目標に向かう〕方向線が確立され、個人ははっきりと方向づけられます。まさにこの事実によって、後の人生で何が起こるかを予言できるのです。個人の統覚は、それ以後、必ずこの方向線によって確立された型にはまっていくこととなります。子どもは任意の状況を、あるがままには見ようとはせず、個人的な統覚の枠組みにしたがって見ます。即ち、状況を自分自身の関心という先入見にもとづいて見るのです。

〔『個人心理学講義 生きることの科学』 P.20〕

【資料 4】

人生の最初の四年か五年に、子供は、生まれつきの能力を最初の印象に適応させることで、自分自身のライフスタイルの原型を築きあげます。そして、そのようにして、撤回することのできないライフスタイルの基礎を築きます。これが後になってより定式化されたライフスタイルへと発達し、人生の三つの課題に対する答えを条件づけることとなります。それ以前、あるいは、最も早い時期においては、母親が精神的に健全であることは必須のものです。ライフスタイルが発達する時期には、母親のものの見方と人生についての見方の広さが非常に重要です。

〔『人はなぜ神経症になるのか』 P.44〕

【資料 5】

最も重要なタイプの早期回想は、子ども時代の死ぬ回想です。子どもたちが誰かが突然亡くなったのを見れば、子どもたちの心への影響は、非常に強いものとなります。時にはこのような子どもたちは、病的になります。病的にならないまでも、自分の生活のすべてを死の問題に捧げ、いつも何らかの形で、病気と死ぬ問題と格闘している、ということもあります。このような子どもたちの多くは、後の人生で医学に興味を持つようになり、医者や化学者になるかもしれません。もちろん、このような目標は、人生の有用な面にあります。自分が死と闘うだけでなく、そのことが他の人を助けることになるのです。しかし、時には、原型が非常に自己中心的な見方に発達することがあります。姉の死に大きな影響を受けた子どもが、将来何になりたいか、と尋ねられました。答えとして期待されて

いたのは、医者になりたい、というものでしたが、そう答える代わりに、「墓堀り人になりたい」と答えました。なぜこの仕事につきたいか、と尋ねられて、彼は「自分が埋められるのではなく、他の人を埋める人になりたいんだ」と答えました。この目標が、人生の有用でない面にあることがわかります。この少年は、自分のことにしか関心を持っていないからです。

(『個人心理学講義 生きることの科学』P.110)

【資料 6】

幼い頃の死の恐れは、悪しき優越性の追求を喚起することがあります。それは人を有能にしますが、非建設的であることよりもさらに悪い場合もあります。私が先に言及した十五歳の少年は姉の死に強い印象を受け、しばしば死について語りました。何になりたいかとたずねた時、私は彼が「医師」と答えると思っていたのですが、彼の答えは「墓堀り人になりたい。埋葬される人になりたくないから、他の人を埋葬したい」というものでした。そこで彼はそのようになりました。ただし彼自身のやり方で。商人、競争相手を「葬る」(裏切る、葬り去る) 辣腕のビジネスマンになったのです。

(『人はなぜ神経症になるのか』 P.170～P.171)

【資料 7】

子供が成長の過程で行う職業選択のすべてを比較することは価値あることです。全体として見れば、行動の道筋と共同体感覚と勇気の程度を明らかにするからです。非常に奇妙で狂信的な選択も無視するべきではありません。そのような選択は、子供たちが現実の要求に対して取ろうとしている態度と隠喩的な仕方に関係しているからです。たとえば、ある少年は将来何になりたいかと私が問うと「馬」と答えました。彼はいつも馬の動きとスピードを模倣しようとしていました。赤ん坊の時、彼は心内膜炎になり、長い間ベッドで安静にしていることを余儀なくされました。後に職業として車のエンジニアを選択することで現実的に表現しました。別の七歳の少年も野心を馬になりたいということで象徴化しました。理由をたずねると、こういいました。「お父さんは病気なんだ。僕は長男だから家族を支えなくてはいけないんだ」

このケースのどちらにおいても系統発生の影響、あるいは性的な動機に空想の原因を探るのはばかげています。最初の少年は動きに関心がありました。病気のために動けなかったことで独特の劣等感を持つようになったのです。二人目の少年の馬という考えの使い方はまったく異なったものでした。父親に代わり、父親を超えるにはどうしたら一番よいか考えていました。馬は重荷を荷うものとしての自分の将来の象徴だったのです。十歳の少年からこのような動物の空想を聞いたことがあります。その少年はバッファローになりたいとっていて、突進するバッファローを真似た姿勢で家に帰っていました。彼はあばれ者になりました。そして歴史上の理想人物はアキレスでした。

(『人はなぜ神経症になるのか』 P.174～P.175)

《参考文献》

「個人心理学講義 生きることの科学」 A.アドラー 岸見一郎 訳 野田俊作 監訳 一光社

「人はなぜ神経書になるのか」 A.アドラー 岸見一郎 訳 春秋社